

第一章 生い立ち

激動の時代

林敏生の幼い記憶には、統治初期の殺戮から一変、人間味ある政策で植民地の懐柔を企て、同化教育にもよほど手慣れてきた頃の日本の印象が刻まれている。林敏生はこうして、他の同世代の子供たちと同様、彼らの親たちの世代とは、まったく違う日本人観を抱くようになっていた。

林敏生の通っていた幼稚園と小学校はほとんどが日本人子弟。それでも同級生や先生から差別を受けたことはない。しかも流暢な日本語を話す敏生は、もともと日本人と見分けがつかない。小学校四年の時、出身地の調査で、彼が「本島の生徒」だと知った同級生は仰天した。誰もが日本人だと思いついていたのである。

授業前に必ず教室をきれいに掃除する生徒たち、白手袋と帽子姿でこまめに働く運転手。国民政府が初めて台湾に來た時の混乱に引き較べて、「日本人は礼儀正しくきれいな好き」という印象は、強く彼の脳裏に焼きついている。

さて、日本統治に終止符が打たれる前の最後の六ヶ月。情け容赦のない米軍の爆撃に生活の基盤を奪われた林家は、母方のおじの所有する外双溪の家宅に身を寄せる。不自由な疎開生活だったが、敏生には楽しくてたまらない。完全休校をよいことに、ふつてわいたこの郊外の休日を満喫した。

世界を巻き込んだ大戦の只中で、「毎日遊んでばかりいた。」と彼は告白する。まき割りや水汲み、畑仕事までやらされたが、野菜の作り方や見分け方など、新しい知識も増えた。子供らで植えたキャベツは失敗の連続。インゲンだけは面白いようにとれたが、おかげで六ヶ月間、食膳の豆料理には事

欠かなかった。

戦争の恐怖も別世界での出来事。疎開生活は林家の子供たちにとって、忘れ難く美しい思い出の一つとなった。

終戦。台湾は「光復」された。大人たちが厳肅な面持ちで玉音放送を拝聴したその瞬間から、各家庭に奉られていた御真影ははずされ、国父孫文の写真が掛けられた。「国にもお父さんがいるの？」と敏生は不思議がった。

「光復」はされたが国民政府はまだ来ない。台湾は統治者のいない無政府状態のまま。従来どおりのスタイルでその日その日を暮らしていたが、新しい変化を、誰もが待ち望んでいた。

そして「新しい変化」は訪れた。陳儀が、よれよれの軍隊を率いてやって来たのである。沿道で迎えた民衆は失望の面持ちで、「祖国」の軍隊が、日本軍とは比較にならない代物であることを口々ささやき合った。

教科書にも新しい変化。中国語が日本語に取って代り、北京語のできる人はひっぱりだこ。にわかには語学塾が増えた。林家も塾通い。たどたどしい巻舌の北京語がいたるところで聞かれた。父母の衣鉢を継いで教職にあった敏生の上の姉も、每晚悪戦苦闘。付け焼き刃の北京語を翌日、教室で教えていた。

しかし子供たちには、大人たちのはしゃぎぶりがよく理解できなかつた。生まれながらにして日本語を話し、君が代を唱い、天皇を尊敬し、日本人と日常をともしてきた敏生たちにとって、日本のどこが悪いのかピンと来なかつた。日本はそれほど身近な存在だったのである。

親たちが日本人を嫌っていることに、敏生もうすうすは気がついていて、教師の給料は日本人が台

湾人の五割増。仕事から帰ってきた父が、植民地への差別待遇に不平を漏らし、時には日本人を犬呼ばわりしていることも知っていた。しかし敏生ら子供たちにとっては、日本時代に履けた靴が国民政府が来てから履けなくなったことの方がよっぽど衝撃的だった。

台湾人はがまん強い。こうして大人も子供も、新しい環境に慣れようと必死に努めていた。その矢先に起こったのが二二八事件。民国三六年（一九四七年）春のことだった。

敏生の印象では、事件発生当初は台湾人が外省人をやっつけていた。地下に潜伏した台湾人を政府当局が拘引しはじめたのは三月下旬以降。恐怖の日々が一ヶ月前後も続いた。

平静を取り戻したあとも、ぎくしゃくした雰囲気は残り、白色テロは処々に見え隠れしていたが、国外に留まるか投獄された「言うことを聞かない連中」以外は、政治的なタブーにさえ触れなければ衣食に困らないと悟って、現実的な「錢途」に邁進することとなった。台湾経済はこうして飛躍を始める。

エピソード

自称「愉快の化身」。林敏生の人生はenjoy everything。「憂い」とは生涯無縁の彼にとって、思い出の一つ一つは喜びで彩られている。還暦を迎えた今も、彼の口から怨み事が聞かれることはない。